

幼稚園における手遊び歌に関する実践的研究

—「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」領域との関連—

今 由佳里*・尾辻 菜摘子**

(2020年10月21日 受理)

Practical Learning of Music Expression in Japanese Kindergarten
—Relating “Health”, “Human Relations”, “Environment”, “Language”, and
“Expression” in Childcare Contents—

KON Yukari, OTSUJI Natsuko

要約

本論では、幼稚園における手遊びの有用性と、5領域との関連について、筆者のひとり尾辻の実践を中心に、分析・考察を行った。その結果、保育における手遊びの有用性は、子どもにとって楽しく、興味を惹く活動であるということ、指先を使うことで知能の発達に有効であること、集団活動時の導入として効果的であること、生活や季節と相互作用することの4点の可能性が導き出された。また、手遊びは5領域の全てに関連していることを明示し、保育者が手遊び歌の内容を分析し、意図して保育に用いることによって、5領域の目標の達成の一助となることも示唆した。手遊び歌は単に子どもを惹きつけるだけの教材にとどまらず、保育者の教材研究や保育計画によって教育的効果を一層高められることがわかった。

キーワード： 幼児の表現、手遊び歌、手遊び、幼稚園、5領域

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

** 鹿児島大学大学院 教育学研究科 院生

はじめに

筆者のひとり尾辻は、大阪府の公立幼稚園で5年間にわたり幼稚園教諭として保育実践を積み重ねてきた。その実践の中では、日常的に子ども達と一緒に「手遊び」活動を行ってきており、手遊びは保育活動に有効だと手応えを感じる事が度々あった。保育実践の中で筆者が感じた手遊びのよさは、①自分の声と手があればいつでもどこでも行えること、②ピアノが苦手な保育者でも保育に取り入れやすいといった手軽さ、③子どもが声を出したり体を動かしたりして楽しめる能動的な活動であること、④活動にメリハリがつくこと、⑤生活・季節・次の活動などとの繋がりがあつた題材を選べば、他の活動と相互作用して教育効果をより発揮できる、という5点に集約できる。幼児期は、生きていくうえで身に着けるべき諸能力が相互に関連し合い、総合的に発達していく時期である。それを踏まえると、幼稚園教育要領にある「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域を超えた総合的な学びを展開する必要があるのではなからうか。手遊びは歌を歌ったり、リズムに合わせて手指を動かしたりすることから主に「表現」領域の活動と捉えられることが多いが、尾辻は実践を行う上で他の領域や活動との関連も加味することが子どもの発達に重要と考え、保育を行っていた。

本論では、筆者の実践から得られた知見と、先行実践事例の分析・考察を通して、保育における手遊びの有用性と5領域との関連について明らかにしたい。

1. 保育現場における手遊びの先行実践事例

『保育用語辞典(2002)』では、「手遊び・指遊び」の項において「唱えことばや歌に手や指の動きを伴った遊び。わらべうたが伝承されたもの、外国から入ってきたもの、創作されたものがある」¹⁾と記述されている。これを踏まえて本論文では、子どもが唱えことばや歌に合わせて手や指を動かして遊ぶことを「手遊び」とし、手遊びの際に使われる楽曲あるいは教材を「手遊び歌」と定義して論を進めていく。

保育現場において手遊びは、日常的に頻繁に用いられている活動である。これについて、笠井ら(2015)が、保育士と幼稚園教諭に行ったアンケート調査では、手遊びを保育の中で「よく歌う」が80%、「歌う」が15%と集計しており、合計すると95%が保育に手遊びを取り入れていることがわかる。取り入れるタイミングについては、「保育活動前の導入として」が61%と最も多く、他は「登園して保育の始め」「手遊びそのものを活動として」「降園する前」がそれぞれ6%と示している。また、「手遊び歌を保育に取り上げることはいいことだと思いますか」については、100%が「はい」と回答している。この結果から手遊びは、多くの保育者が実践を通して有効であると感じていることがわかり、保育に手遊びは欠かせないといっても過言ではないといえるのではなからうか。

保育現場における先行実践事例を分析すると、①手遊びから始まる他活動への展開に関するもの、②音楽表現・音楽の技能に関するもの、③身体表現・身体活動に関するもの、④数学の概念に関するもの、⑤保育活動中の効果に関するもの、⑥食育(健康)に関する

もの、⑦指先と脳との関りについて、といういくつかの傾向が見えてくる。以下に手遊びから得られる効果について、それぞれの実践事例から引用して、整理する。

①手遊びから始まる他活動への展開について、斉藤ら（2010）は、手遊びを展開させた保育実践を複数紹介している。それらの実践では、手遊び中に保育者と子どもとの会話を取り入れ、そのやりとりの中で子どものイメージや即興表現を引き出したり、手遊びからごっこ遊びや鬼ごっこなどに展開し、「総合的な遊び」を子どもに提供できるとしている。また、子どものイメージを引き出し、遊びを創造するためには、保育者が手遊びをアレンジするなどして「使いこなす」ことが必要だとも述べている。②音楽表現・音楽の技能に関するものについて、吉田ら（2018）は、子どもの音楽表現と「遊び歌」について研究している。保育学生を対象とした実践検証から、手遊び歌やわらべ歌の持つ可能性について、遊び歌は「楽しい」ために音楽的な難しさを感じさせず、自然と歌うなど表現する能力が高まると考察している。また、わらべうたは5音階が中心で3度以上の音程跳躍がないことや、手遊び歌はほとんどが西洋音階でつくられており、子どもの嗜好を取り入れ比較的最近つくられた歌が多いことも示唆している。一方で若谷（2018）は、保育者へのインタビューから、伴奏や音程を重視しないという傾向があることを明らかにし、手遊びが「歌」であることへの認識やそれを高めるための働きかけが必要であるとしている。また、笠井ら（2014）は、手遊び歌を用いて、遊びを通しての歌唱指導をしていくことを提案している。③身体表現・身体活動に関するものについて、山口（2012）は、創作ダンス活動（保育学生）において、「ドレミの歌」の手遊びを手掛かりとして身体表現（ダンス）に発展させることで、個人の自由な発想や、独創的な表現への発展がスムーズにでき、積極的な創作ダンスへの取り組みが見られたことを述べている。古市（2006）は、幼児が手遊びを楽しむようになるまでの身体の動きの習得について、2歳児は大きな模倣はできるが、指先の細かい動きは難しいこと、3歳児は5本の指がより自由に使えるようになることを示している。④数学の概念に関するものについて、久米（2018）は、幼児が親しむ手遊び歌の中には、数学の基礎が含まれているものが数多く存在することを提示している。手遊び中に、子どもが数量について考えることができるような発問をしたり、数字カードなどの道具を示すといった環境設定や援助を行うことで、子どもの数量や図形に関する興味や感覚が高まることを示唆している。⑤保育活動中の効果に関するものについて、目久田ら（2018）は、子どもを2グループに分け、その後の制作活動に関連のある手遊びを行うグループと、関連の無い手遊びを行うグループで、制作活動への取り組みを比較する実験を行った。その結果、保育活動のテーマと関連した手遊びである場合に、活動の序盤において幼児の集中力が高まることを明らかにしている。⑥食育（健康）に関するものについて、神澤ら（2018）は、放課後児童クラブの低学年を対象とした歌と手遊びによる「食育融合型消費者教育」の試みを実践した。「手遊びおやつソング」を歌うなどする活動後のアンケート調査では、適切なおやつ量、栄養素の働きに関する知識の理解度が有意に上昇したと分析している。⑦指先と脳について、カナダの脳外科医ワイルダー・ペンフィールド（Wilder Penfield, 1891-1976）は、脳と体部位との対応関係を調べる実験の中で、手、唇、舌、顔を動かす或いは感じる脳の面積は大きく、手は運動野の3分の1、感覚野の4分の1程度を占めていることを明

らかにしている²⁾。これを踏まえて中村ら(2018)は、計算問題の前に音楽に合わせた指先運動をしたグループとしなかったグループでは、指先運動を行った方が計算問題の正当数が高かった実験結果を示している。この結果から、手指を使う動作が脳に働きかける効果は大きいことを述べ、音楽に合わせた指先運動が脳を活性化させる効果を持つ可能性が示唆されたとしている。

手遊びは、歌やリズムに合わせて遊ぶことから、「表現」領域の活動だと捉えがちになる。しかし上記した先行実践事例から、手遊びが「表現」以外の他の領域とも深く関連し、保育者が意図して用いれば、実践の中で他領域の教育的効果を高められることがわかる。

2. 手遊びと幼稚園教育要領5領域との関連

前出の笠井ら(2012)の調査では、多くの保育実践者が手遊びを積極的に保育に取り入れていることを明らかにしている。では、具体的に子どもの発達にいかなる効果がみられるか、幼稚園教育要領(平成29年告示)に基づいて考察する。幼稚園教育要領では、幼児期において育みたい資質・能力について、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域で示している。以下、各領域[内容]と手遊びの関連について分析・考察する。

○ 領域「健康」

乳幼児教育でいう健康とは、心と体の双方の健康のことである。幼稚園教育要領解説には「幼稚園においては、一人一人の幼児が教師や他の幼児などとの温かい触れ合いの中で楽しい生活を展開することや自己を十分に発揮してのびのびと行動することを通して充実感や満足感を味わうようにすることが大切である」とある。

[内容](1) 先生や友達とふれあい、安定感をもって行動する。

手遊びは、教師を真似て、学級など自分の所属する友達全員で一緒に行う場合が多い。そのような「楽しい」時間を共に過ごすことが、喜びや充実感につながるものと考えられる。そうして次第に、学級が心地よい場所になることで子ども達は安定感をもち、様々な遊びに向かっていく基盤となると考えられる。

[内容](5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。

手遊びには食べ物を題材にしたものが多くみられる。一例を挙げると《おべんとぼこのうた》《りんごがころころ》《やきいもグーチーパー》などである。幼児の園生活や季節に沿った題材を選ぶことで、手遊びをきっかけに食への関心をもつことが期待できる。

○ 領域「人間関係」

人と関わる力を育てる「人間関係」は保育現場において、教師との信頼関係が基盤となる。それは幼稚園での自然な生活や遊びの中でのかかわりを通して育まれる。手遊びを行

うとき、幼児は教師の真似をして歌や動き、その空間を共有する。教師が一人一人の幼児に目配せをしたり、手遊び歌によっては言葉のやりとりを行ったりと、教師と幼児が触れ合い心を通わせるきっかけとなる。

[内容] (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。

領域「健康」でも述べたが、手遊びは多くの場合、自分が所属する学級などの友達全員と一緒にやる。「楽しい」時間を共に過ごすことが、喜びや充実感に繋がると考える。

○ 領域「環境」

「環境」で養うべきは、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力」である。世の中には膨大な数の手遊び歌があり、題材も様々である。子どもが親しみやすいという点で、子どもの身近なものが題材になっている手遊び歌も多い。手遊びが、ある環境に好奇心や探求心をもつきっかけとなる可能性を以下に述べる。

[内容] (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。

手遊びは、子ども達が自然に興味を持ち、触れるきっかけとなる可能性がある。例えば《キャベツの中から》の手遊びでは、「キャベツ」と、そこに生まれた「あおむし」を観察するきっかけに、さらには、あおむしがいるのはなぜかということにまで考えを巡らせたり、観察したりすると、チョウが卵を産むという生命の不思議さなどを感じるきっかけとなる。

[内容] (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。

手遊びは、短時間で、また道具などは使わずに行えるという利点がある。手遊び歌の、歌と指の動きを覚えてさえいれば、いつでもどこでも気軽に楽しむことができる。その特徴から、活動を始める前、活動と活動の間など、活動の合間に行われることも多い。つまり、子どもたちが園で送る日常生活のあらゆる場面に手遊びは見られる。手遊び歌の中には、指や手で形をつくったり、1から5の数字が出てくるものも多くある。そのような題材の手遊びを行うことは、日常生活の中で自然に数字や数量、図形などに触れ、関心を持つことにつながるだろう。

○ 領域「言葉」

領域「言葉」で身に付けたい力は、言葉で表現する力、相手の言葉を聞こうとする態度、言葉に対する感覚の3点である。幼稚園教育要領解説においては、「絵本などの物語や詩などの言葉」が、言葉に出会うものの例として挙げられている。これらと同じように手遊びも、保育者の真似をして歌ったり言葉を発する特徴から、言葉に出会い、その美しさや楽

しさに気付くきっかけになると考える。

〔内容〕(7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。

手遊びは降園活動時や絵本の読み聞かせの導入時など、集団の中で行われることが多い。内容(7)の解説には「言葉はただ単に、意味や内容を伝えるだけのものではない。声として発せられた音声の響きやリズムには、音としての楽しさや美しさがある」とある。例えば《かみなりどんがやってきた》では、「ドンドコドン・ドンドコドン」という言葉の響きや繰り返しの楽しさに気付くことができる。

○領域「表現」

領域「表現」には、幼児が「感じたこと、考えたことなどを、音や動きなどで表現したり、自由にかいたりつくったりする」等、様々な方法で自己表現することが含まれている。手遊びは、音楽を基盤として、言葉や手指の動きを伴った表現活動であるといえる。

〔内容〕(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

手遊びは、保育活動の中で多用されている。手遊び歌のCDや楽譜集は数多く出版されており、保育現場でも伴奏に合わせて手遊びをしたり、あるいは歌が入っているCDを用いて指を動かして手遊びに参加する活動がみられる。しかし多くの場合、手遊びは保育者の声のみによるアカペラにて行われることが多い。その理由は、領域「環境」内容(9)で述べたように、手軽にいつでもどこでも行えるという手遊びの利点を生かして、保育に用いられるためである。子ども達は保育者の歌をよく聴いてメロディ、歌詞、速度などを感じ取り、保育者や友達と合わせて表現する。このことは、手遊びを楽しむ中で、音楽的な聴く力・表現する力の基礎を、自然に経験しているといえるのではないだろうか。

〔内容〕(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

《グーチョキパーでなにつくろう》は、手でつくるグー・チョキ・パーの形が何に見えるか、イメージして楽しむ手遊びである。保育者が定型の例を提示する方法もあるが、子どもに自由に考えさせると、何に見えるか一生懸命に想像を巡らせる。そうすることで、想像する力や、想像したことを言葉で表現する力に繋がるのではないだろうか。

上記した分析より、手遊びはそれぞれ全ての領域に関連付けられて、活動されていることを明示することができた。保育者が手遊びと5領域の関連を意識し、また意図して用いることによって、手遊びは子ども達に様々な教育的効果をもたらすことが期待できる。それは、保育者や友達との心の触れ合いや情緒の安定、自然に興味を持ち、その美しさや不

思議さに気付く、数感覚が養われる、言葉のもつ楽しさや美しさに気付き、リズムカルな音の響きを楽しむ、表現の基盤を養う等が挙げられる。これらから、幼児期に身に付けた力を育てるには、手遊びが有用であると考察できた。

3. 手遊びから発展する保育活動の概要と実践記録

本稿では、筆者のひとり尾辻が勤務していた幼稚園で実際に行った、手遊びから発展する4つの保育実践事例を取り上げて、考察する。

(1) 《5つのメロンパン》

①実践の概要

【対象者】大阪府高槻市立富田幼稚園 そら組（異年齢（4～5歳）児学級）

【園児数】20名（年長児10名うち男子5名、女子5名 年中児10名うち男子5名、女子5名）

【保育日時】2017年6月～2018年3月

【保育者】尾辻 菜摘子

②手遊び歌の概要

《いつつのメロンパン》

作詞：中川ひろたか 曲：イギリスのあそびうた

パンやにいつつのメロンパン
ふんわりまるくておいしそう
こどもがおみせにやってきて、
“おじさん、メロンパンひとつちょうだい”
“ハイ、どうぞ”
メロンパンひとつ買ってった

パンやにふたつのメロンパン
ふんわりまるくておいしそう
こどもがおみせにやってきて、
“おじさん、メロンパンひとつちょうだい”
“ハイ、どうぞ”
メロンパンひとつ買ってった

パンやによっつのメロンパン
ふんわりまるくておいしそう
こどもがおみせにやってきて、
“おじさん、メロンパンひとつちょうだい”
“ハイ、どうぞ”
メロンパンひとつ買ってった

パンやにひとつのメロンパン
ふんわりまるくておいしそう
こどもがおみせにやってきて、
“おじさん、メロンパンひとつちょうだい”
“ハイ、どうぞ”
メロンパンひとつ買ってった

パンやにみっつのメロンパン
ふんわりまるくておいしそう
こどもがおみせにやってきて、
“おじさん、メロンパンひとつちょうだい”
“ハイ、どうぞ”
メロンパンひとつ買ってった

『手あそびブック』（2007）より

この手遊び歌が生まれた背景は、中川が『子どもの遊び研究会』に参加していた際、湯浅とんぼから、イギリスの遊び歌の本 Elizabeth Matterson 著 *Games for the Very Young* を渡され、その中に収録されていた《Five Currant Buns》を日本語に訳したものだという。また、

手遊びの中にある、子どもとおじさんとの言葉のやりとりは、中川のオリジナルには無く、現場で歌われる中で保育者がアレンジしたものが広がったとある³⁾。

この手遊びは、単に保育者の真似をして歌と指先の動きを楽しむだけではなく、“お買い物ごっこ”をしているような感覚をもって、お店屋さんとのやりとりを疑似体験することにより、能動的に楽しめ、子ども達に人気の手遊びである。

本実践の保育者尾辻は、「そこへ子どもがやってきて」の箇所を「そこへ〇〇さんがやってきて」と、クラスの子どもの名前を呼ぶようにアレンジして(譜例1参照)、毎朝登園後、朝の会の始めに《5つのメロンパン》の手遊びを行っていた。

この歌に、より深く入り込んでやりとりなどを楽しむために、フェルトで作ったメロンパン(写真1参照)を用いて手遊びを行った。

【譜例1：《5つのメロンパン》】

《5つのメロンパン》(青字の歌詞は、保育者のアレンジである)

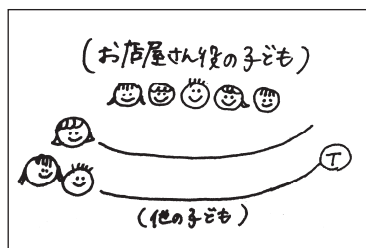
パンやにいつつの メロンパン ふんわりまるくて おいしそう

子どもがおみせに やってきて おじさん、メロンパンひとつちょうだい はいどうぞ
 そこへ〇〇さんが やってきて メロンパンひとつください はいどうぞ

メロンパンひとつ かってった

③実践の形態

本実践における子どもと保育者の配置は、図1の通りである。登園して身支度を済ませた子ども達から順に普段の定位置に集合し、保育者は子どもと共に床に座る。手遊びの中で子どもに配っていくメロンパンは、写真1のものである。「そこへ〇〇さんがやってきて」というフレーズでは、指名された〇〇さんに、写真のメロンパンを一つずつ渡す。



【図1：子どもと保育者の配置】



【写真1：フェルトで作ったメロンパン】

④手遊び《5つのメロンパン》の実践記録と活動分析

【表1：手遊び《5つのメロンパン》の実践記録】

ねらい ・手遊びの中での友達とのやりとりを楽しむ。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1. 5人の子どもがお店屋さんの役になり、一人一つずつ指にメロンパンをつけて手遊びを始める。	子どもの輪の中で一緒に手遊びを楽しみ、歌や手の動きを真似できるようにする。	それぞれ楽しんで、手遊びをしている。
2. 「そこへ〇〇ちゃんがやってきて」と、友達を指名する。	言葉が詰まった場合には、「誰にするか決まった？」と声をかけ、再びそのフレーズを歌えるようにする。	指名された子を注目し、次の言葉「メロンパンーつください」を待っている。
3. メロンパンを回収する。	回収し終えたメロンパンを受け取る。	メロンパンを食べるふりをするなどしてから、保育者に渡す。

【表2：「メロンパン会議」の実践記録】

ねらい ・学級全員で手遊びを楽しむために、どうすればよいか考える。 ・相手の考えをよく聞き、一緒に考える。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1. 友達の気持ちを知る。	「メロンパン屋さんをやりたい人？」と、投げかけ、「したい」気持ちは全員同じであることがわかるようにする。	全員が挙手し、思いを伝えようとする。
2. 当番決めの方法を考える。	どのような方法があるか考えられるようにする。子どもの考えを聞き終えたら、「交代で、全員が満遍なく行える」ようにしたいことを確認する。	「あっち向いてホイで決める」「名前順」「年長から先にする」「年中と年長が交互にする」等、様々な提案がある。
3. 当番の人数を考える。	「何人ずつ、交代していったらいいと思うか」を投げかける。	考えたことを、理由とともに発表する。
4. まとめをする。	5人ずつ毎日交代で行うことを確認する。	時間をかけて、学級でひとつの結論を導き出したことに、満足した様子である。

⑤考察

お店屋さん役の5人は、「せーの」と声を掛け合って手遊びを始めたり、「そこへ〇〇さんがやってきて」と友達を指名したりと、手遊びを進めていく上で非常に重要な役割を担っている。お店屋さん役の子どもにとっては、そのことに充実感を感じ、自信に繋がっている様子が見られた。他の子どもは、誰が指名されるか期待を膨らませながら待っているため、自然とお店屋さんの子どもの言葉に、耳を澄ませる様子が見られた。「話す人」「聞く人」という行動が、楽しい活動の中で自然と鍛えられている。これは授業において必須のスキルであるため、園生活のあらゆる活動を通じて就学前に身につけておくべきであろう。筆者はこの手遊びを毎日の登園後、朝の会の始まりに行っており、手遊び中に話を聞く姿勢や座る場所など子ども達が落ち着いて朝の会に参加できる状態を整えられることで、手遊びの後スムーズに朝の会に移ることができていた。

表1のように、手遊びの中で「そこへ〇〇ちゃんがやってきて」と指名された後には、「メロンパンーつください」「はいどうぞ」の決まった言葉のやりとりとフェルトで作ったメロ

ンパンのやりとりが行われる。この活動は、子ども同士のコミュニケーションが行われ、人間関係の広がりにつながると考えられる。また、上述したように、遊びの中で決まった言葉でのやりとりを繰り返し行うことで、日常生活での活用にも繋がるだろう。「ください」「どうぞ」「いれて」「いいよ」「おかえり」「ただいま」など、決まった言葉のやりとりは、繰り返す中で自然と生活の中での言語表現の一部になる。この手遊びを繰り返すうちに、「ください」「はいどうぞ」の後に、さらに自然に「ありがとう」と返す子どもが増えていったことは、保育者として印象深い出来事であった。この手遊びを通してメロンパン屋さんの世界観に入り込み、楽しむ中で、子どもの言語表現の広がりも垣間見えた。

また当初、手遊びのお店屋さん役は、身支度を済ませた子どもから行っていた。「お店屋さん役をしたいから早く用意を済ませて集まろう」と生活の意欲につながっていたことから、毎日繰り返す中で多くの子どもがスムーズに集合できるようになっていった。そのためジャンケンで当番を決めていたが、ある日「ジャンケンで決めるのいやだ」という声が出てきた。そこで、学級で「メロンパン会議」を開き、納得して手遊びを楽しめるようにした。

この「メロンパン会議」は、学級全員で2日間にわたって行われ、どうすれば全員が納得して手遊びを楽しめるかについて、子ども達の考えを出し合う話し合いであった。最後は「メロンパンが5つあるから、5人ずつ交代でやろう」という案に決定し、話し合いの中では数量の感覚（「環境」）、友達と共通の目的（「人間関係」）、思いを伝えたり聞いたりする（「言葉」）など他領域の要素が含まれる活動となった（表2参照）。幼児が20名の大人で話し合いをするのは容易なことではないが、真剣に友達の意見を聞き、自分の意見を言い、全員で一つの結論に達するまで話し合いができたのは、それまでにこの《5つのメロンパン》の手遊びに親しみ、子ども達にとってこの手遊びが「大好き」で、園生活の中で重要なものになっていたことが大きいだろう。

尾辻は、保護者に上述している子ども達の様子を伝えるために、クラスだよりを発行した（参考資料1参照）。後日、保護者から「メロンパン会議、とってもよかったです」と反応があった。子ども達が意欲的に自分達の生活を進めていることを、保護者に理解してもらえる機会となった。

（2）《わにの家族》

①実践の概要

【対象者】大阪府高槻市立富田幼稚園 そら組（異年齢（4～5歳）児学級）

【園児数】20名（年長児10名うち男子5名、女子5名 年中児10名うち男子5名、女子5名）

【保育日時】2017年6月～7月

【保育者】尾辻 菜摘子

②手遊び歌の概要

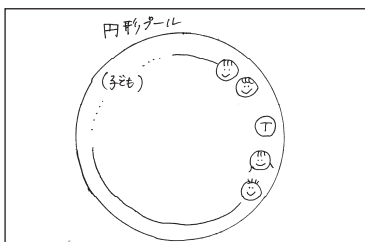
《わにの家族》 作詞：上坪マヤ 作曲：峯陽

わにのおとうさん わにのおとうさん おくちをあけて ぱかっ！ めだま ぎよろぎよろ めだま ぎよろぎよろ およいでいます	わにのおねえさん わにのおねえさん おくちをあけて ぱかっ！ おけしょう ぱたぱた おけしょう ぱたぱた およいでいます
わにのおかあさん わにのおかあさん おくちをあけて ぱかっ！ おっばい ぼよよん おっばい ぼよよん およいでいます	わにのあかちゃん わにのあかちゃん おくちをあけて ぱかっ！ みるくごくごく みるくごくごく およいでいます
わにのおにいさん わにのおにいさん おくちをあけて ぱかっ！ きんにくもりもり きんにくもりもり およいでいます	

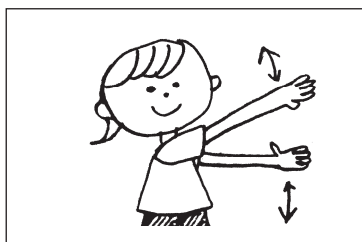
《5つのメロンパン》と同様に《わにの家族》も、保育現場で頻繁に用いられている手遊び歌である。指先を使う手遊び歌が多いのに対して、《ワニの家族》では、腕全体を使ったダイナミックな手の動きが多く、子ども達は喜んで活動していた。筆者はこの手遊びを、普段保育室の中でも楽しんでいたが、水中の生き物「ワニ」をテーマにしていることから、プール指導の際に水中で行うことも実践していた。

③実践の形態（プール内）

実践は図2のように円形のプールの中で子ども達が輪になり、底に座って遊んだ。子ども達は保育者と一緒に、水中でワニを真似て手遊びを楽しんだ（図3参照）。



【図2：子どもと保育者の配置】



【図3：ワニの口のポーズ】



【図4：平泳ぎの動作】

④ 《わにの家族》の実践記録と活動分析

【表3：《わにの家族》実践記録】

ねらい ・ワニになりきって、水遊びを楽しむ。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1.《わにの家族》の手遊びをする。	水を有効に使いながら手遊びを楽しめるよう、手本となる。	普段とは違う水中での手遊びで、水の感触やしぶきを楽しむ。
2.ワニに変身する。	「ワニに変身!」と子どもたちに「魔法」をかけ、ワニになって歩くよう指示する。	両手をつき、足を後ろに伸ばしてワニの真似をして水中を歩く。
3.他の生き物に変身する。	「カニに変身」「イカに変身」など、ワニに引き続き「魔法」をかける。	それぞれの動物の動きで水中を移動する。

⑤考察

この手遊びの保育活動では、両手を大きく開いて閉じる動作でワニの大きな口を表現したり、平泳ぎをするように両手を動かして、ワニが泳いでいる様子を表現している(図3、4参照)。ワニの大きな口を表現する動作では、手を閉じる際に水しぶきが上がるのを取りわけ楽しんだ。子ども達は、手を閉じるタイミングでしぶきが上がることや、手を閉じる強さや振り下ろす高さによってしぶきの高さが変わることを、この手遊びの中で自然と感じ取っており、自分の手の動きを調節して楽しむ様子がみられた。ワニが泳いでいる様子を表現する動作では、水中で行うことで水をかく感触や泳いでいる感覚を楽しむことができた。また、「お化粧パタパタ」のところでは手を水に濡らして顔につけたり、「ミルクごくごく」では両手に水をすくって口元に近づけ、飲む真似をするなどして、まるで“ごっこ遊び”をするように、手遊び歌の世界観に入り込みながら、楽しく水に親しむ姿が見られた。その後は、自分たちがワニになりきって、水中での動きを楽しんだ。活動1は、手遊び自体が、手遊びと水の感触を楽しむメインの活動である。その活動1が、活動2・3に対しては、子どもが水中の生き物になりきって伸び伸びと水遊びをするための導入にもなっている。子どもは、何かになりきって遊んだり、表現したりすることを楽しむ。子ども達の意欲を高め、楽しんで水中で遊ぶのに効果的だったと考察できる。

(3) 《はじまるよ》

①実践の概要

【対象者】大阪府高槻市立富田幼稚園 そら組(異年齢(4~5歳)児学級)

【園児数】20名(年長児10名うち男子5名、女子5名 年中児10名うち男子5名、女子5名)

【保育日時】2017年4月~2018年3月

【保育者】尾辻 菜摘子

②手遊び歌の概要

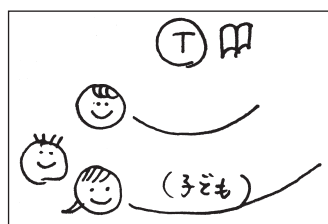
《はじまるよ》作詞：不詳 作曲：不詳	
はじまるよったら はじまるよ はじまるよったら はじまるよ 1 と 1 で 忍者だよ ニン	はじまるよったら はじまるよ はじまるよったら はじまるよ 4 と 4 で たこのあし シュッ
はじまるよったら はじまるよ はじまるよったら はじまるよ 2 と 2 で カニさんだよ チョキン	はじまるよったら はじまるよ はじまるよったら はじまるよ 5 と 5 で 手はおひざ
はじまるよったら はじまるよ はじまるよったら はじまるよ さん と さん で ねこのひげ にゃん	

賑やかな雰囲気の手遊び歌であるが、最後は「手はお膝」で、自然と子どもたちが落ち着いて「よい姿勢」になれる。子ども達の姿勢が整う要因は、単に手の動きだけではない。それまではフレーズの最後に声を揃えて言った「ニン」「チョコキン」「にゃん」「シュッ」などの擬音が、最後だけは無く、静かに手遊びを終える工夫がなされている。このように、声と手の動きとの両方において、自然と読み聞かせの構えに繋がるような仕掛けがなされている。この効果が、読み聞かせの導入として頻繁に用いられる理由と考えられる。

この手遊びの実践では、最後の五指を揃えて「5と5で手はおひざ」の部分で、「手はおひざ」の前に「手は〇〇」と、〇〇の部分に「ほっぺた」「おなか」など体の様々な部位をランダムに指示し、その場所を両手で触るという遊びを加えてアレンジして行った。これは、絵本を見るのに適した姿勢をつくるための導入としての効果に加え、遊びの中で保育者の言葉を注意深く聞く態度も養えるものと考えられる。

③実践の形態

図5は、手遊びと読み聞かせの実践における子どもと保育者の配置である。子ども達は床に座り、保育者は絵本が見えやすいように椅子に座って向かい合った。



【図5：子どもと保育者の配置】

④ 《はじまるよ》実践記録と活動分析

【表4：《はじまるよ》の実践記録】

ねらい ・手遊びを楽しみ、絵本を見る活動に適した環境をつくる。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1.《はじまるよ》の手遊びをする。	活動2を踏まえ、全員が絵本が見える場所にいるか確認しながら行う。	保育者の真似をしながら手遊びを楽しむ。
2.手は〇〇で、体の部位を触る。	子どもの反応を見ながら、少し遅れて見本を提示する。	保育者の言葉を注意深く聞き、どの部位が言われるか楽しみに待っている。
3.絵本を見る。	手遊びで整えられた雰囲気のままスムーズに始める。	前のめりになり、興味深そうに絵本を見る。

⑤考察

これもまた、前出2つの手遊び歌と同様に、保育実践現場ではよく用いられており、絵本やパネルシアターなどの導入として頻繁に使われている。絵本に限らず何か活動を始めるときには、それに集中できる心理的・物理的な状態を整えることが必要である。絵本を見る際に整えたいことは、それぞれが絵本が見える位置にいること、そして静かで落ち着いた空間を設えることである。手遊びを行っている時、子どもは自然と保育者が見える場所に座るよう自分で調整する。保育者の動きを真似するという手遊びの特質によるものと考えられ、保育者は必要以上の言葉を投げかける必要が無い。また、子ども達が声を出したり体を動かしたりする動的な活動を行うことで、その後の静的な活動とのメリハリがつく。手遊びの中で声と動きを発散させられることで、読み聞かせの際は対照的に落ち着いて絵本を見られる効果がある。ここでも保育者は、「静かにしなさい」などと子どもを制止するような言葉を発さなくてもよい。手遊び歌の内容を吟味して保育に取り入れることで、次の活動にスムーズに移ることができたり、効果を発揮できると考える。「静かにしなさい」「手を膝においてよい姿勢をとりなさい」と、できていないことを指摘するのではなく、子どもが自発的にできる環境を提供するのが望ましい保育のあり方ではないだろうか。

上述したように、子どもが意識しすぎることなく自然に望ましい態度をとれるように仕掛け、保育の中で繰り返していくことで、それが生活習慣となって積み重ねられて自ら望ましい態度をとることができるようになっていくものと考えられる。

(4) 《にんじゃのつくりかた》の実践

①実践の概要

【対象者】大阪府高槻市立富田幼稚園 にじ組(異年齢(4～5歳)児学級)

【園児数】19名(年長児12名うち男子7名、女子5名、年中児7名うち男子2名、女子5名)

【保育日時】2018年1月～2019年3月

【保育者】尾辻 菜摘子

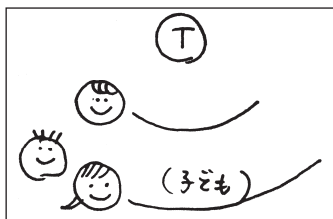
②手遊び歌の概要

《にんじゃのつくりかた》 作詞：不詳 作曲：不詳	
1と1で じゅもんをとなくて	4と4で かくれみのじゅつ
2と2で かたなをぬいて	5と5で しゅりけんうって
3と3で ずきんをかぶって	にんじゃになりました にん!

筆者の勤務していた幼稚園では、毎年2月に生活発表会があり、クラスで劇遊びなどを行い、保護者に披露していた。クラスでは、これまでの遊びの中で忍者ごっこをして楽しむ子どもの姿が見られたため、クラス全員で忍者の劇遊びをすることに決めた。劇遊びでは、決まった物語やセリフを保育者が教え、子どもはそれをただ覚えて発表するのではなく、幼児の自由な表現を大切にしたいという思いから、子どもを中心に、共に劇をつくりあげていく方法をとっていた。そのためには、子どもがその世界に入り込み、忍者になりきって生き活きと遊び、表現できることが大切である。忍者に関する様々な環境を用意したり、「修行」と称した運動遊びを行ったり、この手遊び歌を取り入れたりした。

③実践の形態

図6のように、子どもと保育者は向かい合って座った。前後の活動によっては、椅子に座る場合と床の場合がある。この実践では、次の活動にうつりやすいよう、床に座って行った。



【図6：子どもと保育者の配置】

④《にんじゃのつくりかた》の実践記録と活動分析

【表5：《にんじゃのつくりかた》の実践記録】

ねらい ・ 忍者になりきり、忍者のダンスや「修行」の活動を楽しむ。		
活動	保育者の援助	子どもたちの様子
1. 《にんじゃのつくりかた》の手遊びをする。	表情豊かに手遊びを行う。	保育者の真似をしながら、手遊びを通して忍者に変身できるのを、楽しみにしている。
2. 忍者のダンスや「修行」を行う。	忍者になった高揚感を保ったまま楽しめるように、間をおかず活動に移る。	忍者になりきって、活動を楽しむ。

⑤考察

実践(2)《ワニの家族》でも述べたように、幼児は何かになりきって遊んだり表現したりすることを好み、楽しむ傾向にある。この手遊びにおいても、子どもは次第に「忍者モード」になり、最後の「にん！」の掛け声で忍者に変身し、なりきっていた。実践(3)では、導入としての手遊び

の効果述べたが、本実践でもその効果が2点挙げられる。1点目は、保育者に注目する態勢が整うことである。読み聞かせのときと同様、子ども達の意識が集中することにより、次の活動をスムーズに進めることができる。2点目は、子ども達の気持ちの盛り上がりを促し、次の活動への心の準備をつくることである。ここでは、忍者になりきることによって、その後の活動をより楽しく充実したものにするに繋がった。このように、手遊び自体を楽しむと同時に、導入活動としても手遊びが効果を発揮していたといえる。

4. 手遊びの実践と5領域との関連

本稿では、4つの保育実践を見てきたが、それらは全て5領域のあらゆる領域と関連していた。

一つ目の実践である《5つのメロンパン》では、子ども達がフェルトでつくったメロンパンをやりとりすることによって、子ども同士の交流ができた。また、「いつつ よつつ みつつ…」とメロンパンがひとつずつ減っていくことで数の感覚を養えたり、手遊び中に会話のやり取りをする中では、言葉の表現を獲得していた。この手遊びでは、領域「人間関係」「環境」「言葉」との関連が見られる。二つ目の実践である《ワニの家族》では、普段から楽しんで手遊びをきっかけに水遊びを行うことで、水に抵抗がある子どもも水中の活動を楽しむことができた。また、水中で手遊びを行うことで、水の動きを感じ取っており、領域「健康」「環境」との関連が見られる。三つ目の実践《はじまるよ》では、指が一本から二本、三本…と一本ずつ増えていくことから、数の感覚を養えた。またこの実践は、その後の読み聞かせを効果的に行うための導入活動であり、「言葉」「環境」との関連が見られる。四つ目の実践《にんじゃのつくりかた》でもまた、指を1本から順に増やしていく手遊び歌の内容が、数の感覚に繋がっていた。また、それぞれの本数で何ができるか、何に見えるかを楽しみ、イメージを膨らませていた。さらに、学級全員で同じイメージを共有して遊ぶことによって一体感が生まれ、学級や友達に、より愛着をもつことができた。これらから、この実践には「環境」「表現」「人間関係」との関連が見られたといえる。

また、全ての実践に共通して関連しているのは「健康」「人間関係」「表現」である。「健康」については、「[内容] (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで行う」に当てはまる姿が見られた。学級の子どもの興味は様々であり、活動内容によっては得意不得意もあるだろう。苦手意識や抵抗感がある活動でも、普段から慣れ親しんでいたりと、好んでいる手遊びをきっかけに保育展開を行うことによって、楽しんで取り組むことができた。「人間関係」については、「[内容] (1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう」に該当する。手遊びを通して、保育者を含めた学級全員で同じ音楽、動きを共有することで一体感が生まれ、リズムのある明るい空間を楽しみ、一緒に活動する喜びを感じることができたと考えられる。「表現」については、「[内容] (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」に該当する。歌に合わせて手指を動かして楽しむ手遊びは、歌を歌い、リズムを楽しみ、音楽に親しんでいると言ってよいだろう。

5. 保育における手遊びの有用性と5領域との関連

保育における手遊びの有用性は、以下4点が挙げられる。1点目は、子どもにとって楽しく、興味を惹く活動であるということである。幼児教育は、子どもの主体的な遊びを通して学ぶことを基本とするが、その根幹は「楽しい」ということである。遊びとは本来楽しい活動であり、楽しいからこそ子ども達は主体的になれる。このように、楽しんで取り組むことは「健康」領域の、内容(4)に関連する。また、幼稚園教育要領解説の「表現」の項にも記述されているように、幼児期の子どもは、音楽に関わる活動を好むことに加え、音楽や言葉などに合わせて身体を動かすことを楽しむ。これらより、簡単なメロディーと共に行う手遊びは、幼児の発達に合った活動だと考えられる。保育中の手遊びが「楽しい」活動であることにより、2点目以降に挙げる効果も相乗して期待できる。2点目は、中村の先行研究にもあるように、指先を使うことである。脳の機能の中で指先の占める割合は非常に大きく、乳幼児期に手先を使って脳を刺激することは、知能の発達に有効だと考えられる。また、数字を唱えながら、その数だけ指を立てて動かす手遊び歌は多い。このことは、子ども自身の指先を使った具体的な数と、数字とを、体験を通して結びつけ、領域「環境」の数量の概念や感覚の獲得を助けている。3点目は、集団活動時の導入としての役割である。幼稚園は子どもが初めて集団生活を送る場である。集団で過ごすという特性から、保育者が大勢の園児に向けて話し、子どもはそれを聞き取る、という場面が頻繁にみられる。手遊びを行い、皆で同じメロディーを口ずさむことにより、「保育室内に一体感が生まれる」「手や指先の動きを真似るために保育者を注視する」「終わりがはっきりと決まっているため一斉に静かになる」という状況が生まれる。そうすると、子どもは保育者の話を聞く心構えができ、保育者が学級全体に向けて話すのにふさわしい環境ができる。保育者が「静かにしなさい」「先生のお顔を見るのよ」等、子どもの活動を制限して望ましい姿に向ける場合と比べると、その後の活動に対しての子どもの意欲は高まり、それは、学びの深まりに影響する。4点目は、生活や季節などとの関連である。保育現場で用いられる手遊び歌は、数多くあるが、その中から、子どもの生活や、季節に関連した題材を選ぶことで、手遊びの効果はより高まると考える。また、手遊びをきっかけに、これまで気が付いていなかった身の回りの環境に気が付くこともでき、興味を持つきっかけにもなり得る。例えば《やきいもグーチャーパー》の手遊びを行うことによって、秋の味覚である「焼き芋」を知り、サツマイモという野菜やその味に興味をもつ場合もある。このことが、「食べたい」と思う好奇心に繋がり、それは、領域「環境」に関連して、自然への興味や食育に繋がっていくといえる。この例や先に紹介した実践例に限らず、子どもの生活をよく観察し、成長・発達への願いを明確にすることは、保育に適した手遊びを取り入れることに繋がり、様々な領域や内容の効果を高めることが可能になると考えられる。

手遊びの有用性と5領域との関連について、前述している「2. 手遊びと幼稚園教育要領5領域との関連」の項でも言及したように、手遊びは、5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の複数の領域と関連づけられることがわかった。手遊び歌の内容および保育のねらいとの繋がりを意識した用い方をすることによって、関連する領域の教育効果をより発揮できると考える。

手遊びの有用性として、子どもを保育者に注目させられるという意見を多く聞くが、これまで述べてきたように、手遊び歌には単に子どもの関心を惹きつける以上の要素があると考えられる。その効果を発揮できるかどうかは、保育者の教材研究や保育計画に左右されるといえる。手遊びは、子ども自らが考え工夫して生まれる遊びとは性質が異なり、保育者が提案して子どもに伝達して行う場合がほとんどである。その性質から、保育者が何の手遊びを選択し、子どもに伝えるかは大きな責任を伴うともいえるのではないだろうか。

6. おわりに

本論では、保育現場における手遊びの有用性と5領域との関連、他の保育活動へ発展させた用い方について検討を行った。手遊びは、それ自体だけでも楽しく魅力的な活動である。しかし、保育における手遊びの可能性はそれだけにとどまらない。子どもの注意を惹きつけるためだけに、手遊びを保育の流れの中に取り入れるのではなく、他の遊びや活動、生活と関連させることで、各領域が関連し合い、総合的な保育の可能性を広げるものとなり得る。

また、クラスの中には様々な個性や特性を持った子どもが在籍している。例えば注目欲求が強く、集団活動の中で目立った行動をとる子どもが在籍している場合、その子どもには保育者の代わりに見本になってもらったり、《5つのメロンパン》のように当番のある手遊びでは当番をしてもらうことによって、注目欲求が満たされ、クラスの仲間と一緒に活動することができた経験も多い。

保育現場において手遊びは、極めて多くの保育者が毎日のように取り入れている活動である。だからこそ、教育的効果が高められるような用い方をすることによって、子どもの成長、発達にとってより有意義なものとなるのではないだろうか。

【謝辞】

本稿執筆に際し、ご協力いただいた大阪府高槻市立富田幼稚園の園長をはじめ職員、子ども達に感謝の意を表す。また、《5つのメロンパン》の実践で紹介した手作りのメロンパンは、初任園の大阪府高槻市立郡家幼稚園にて先輩教諭から譲り受けたものである。この場を借りて心より御礼申し上げます。なお、本研究は、大阪府立中央図書館国際児童文学館の所蔵資料を中心に利用して実施した。ここに感謝の意を記しておきたい。

【附記】

本稿は、JSPS 科研費 20K02796 の助成を受けている。

【脚注】

- 1) 『保育用語辞典』第2版、ミネルヴァ書房、2002
- 2) 白澤卓二『100歳までボケない手指体操』、主婦と生活社、2012

3) ここでは、『手あそびブック』(2007)に掲載してある、おじさんとのやりとりが入った歌詞を載せたが、中川は自身の著書で、おばさんと子どものやりとりが全国に広がったと述べている。

【参考文献】

- ・大塚恵子他著『手あそびブック』株式会社世界文化社、2007
- ・笠井キミ子、久原広幸、坂田万代、横山浩平「保育教育における手遊び歌についての一考察」『中村学園大学・中村学園短期大学部 研究紀要』第47号、2015
- ・久米央也「幼児期における数量・図形の関心，感覚を高める手遊び歌の研究—保育者の環境構成と援助のあり方について—」『滋賀短期大学研究紀要』第43号、2018、pp.61-71
- ・斎藤葉子、大木みどり「イメージと即興表現を引き出すための手遊びの重要性（1）—手遊びの展開例をもとにした保育実践—」『羽陽学園短期大学紀要』第8巻第4号、2010、pp.453-464
- ・神澤佳子、片平理子、金坂尚人、千歳万里「放課後児童クラブ（学童保育）の低学年児童を対象とした「歌と手遊び」による食育融合型消費教育の試み」『一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集』第70巻、2018、p.273
- ・中川ひろたか『中川ひろたかグラフィティ〜歌・子ども・絵本の25年』旬報社、2003
- ・中村美佳子、仁科エミ「音楽に合わせて行う指先運動は脳の活性化を促すか：手の進化や脳に関する文献研究より指先運動を考案し計算問題の政党数で効果を検証する」『音楽心理学音楽療法研究年報』第47巻、2018、pp.39-46
- ・古市久子「幼児の身体表現の特徴と手遊びの習得プロセス—3歳までの事例を通して—」『エデュケア』第26巻、2006、pp.1-11
- ・目久田純一、越中 康治「保育活動に対する幼児の集中力に及ぼす導入としての手遊びの効果」『梅花女子大学心理こども学部紀要』第8号、2018、pp.1-9
- ・山口亮子「手遊びから身体表現（ダンス）へ—ドレミのうたをてがかりに—」『日本体育学会大会予稿集』第63巻、2012、p.240
- ・吉田直子「子どもの音楽表現と遊び歌」『奈良佐保短期大学紀要』特別号、2018、pp.1-9
- ・若谷啓子「保育における音楽についての一考察（3）—保育者の手遊びについての意識調査を基に—」『学校音楽教育実践論集』第2巻、2018、pp.149-150
- ・『幼稚園教育要領解説』株式会社フレーベル館、2018

【参考資料1：クラスだより】

そらぐみ メロンパン会議

すこし前の話になりますが…

そら組では「メロンパン会議」が、2日間にわたり行われました。

4月の参観でも見ていただいた、朝の会でのメロンパンの手遊びは、子どもたちの「今日もメロンパンしよう！」の声が続いたことから、恒例になって毎朝楽しんでいました。

少しずつ子どもたちにお店屋さんを任せ、「〇〇さんがやってきて♪」と、お友だちの名前を呼んだり、「ください」「どうぞ」のやりとりを楽しんでいました。

幼稚園の歌が流れ終わったら朝の会が始まります。お店屋さんの役は、園歌が流れ終わったときに用意ができていない子どもに担任からお願いしていましたが、「お店屋さんをしたい！」という気持ちから、用意を済ませて集まる子どもがだんだん多くなっていきました！

集まっている中から、昨日やっていない子…とか、ここにいる人でじゃんけん…と

いう風にお店屋さんを決めることが10日間くらい続いたある日、またじゃんけん決めてようと、子どもたちが「最初はぐー」のポーズをしかけたとき…

「じゃんけん決めてるのいやだ！」という声が。

じゃあどうする？…ということで、メロンパン会議が始まりました。
(お当番を決めるときと一緒にですね)

メロンパン会議録(第1日目)(T:担任 C:子ども)

T:メロンパン屋さんをやりたい人?

C:はい!!

T:みんな、やりたい気持ちがあるんだね。
(↑ここ大事です!始めに確認しました。)

C:あっちむいてホイで決めたら?!
(↑ちなみに…お当番のときもこの案出ました笑)

T:あっちむいてホイで勝った人がするってこと?
ずーっと同じ人が勝って、自分は何回も負けちゃったら?

C:そんなんするいわ!(←ずるいの表現が適切かはさておき、ムラができる可能性があることに気づきました)

T:みんなやりたい気持ちと同じだけあるんだよね。
みんながにっこりになれる方法、なにかないかな…

C:じゃあ、次は〇〇さん、次は〇〇さんっていう風に決めたら?

T:順番を決めて、交替交替にするってこと?
(全員の顔写真を使いながら、こういうこと…と確認しました。)

C:お名前の順番でしたら?

C:年長さんからしよう

C:年長、年中、年長、年中でしたら?

C:パティさんが一緒になるようにしたらいいんじゃない?

C:名前の最後の人からしたら?

C:真ん中の人からしていったら?

C:じゃあ斜めの順番でしよう

C:こういって、こういって、こういって…っていう順番は?

…と、いろいろな順番の案、どうにか自分が一番目に来るようにと試行錯誤した考えもたくさん出ました!笑

ここで10分ほど経過。

「順番を決めて交替です」案でいいことを確認し、どうい順番でするかはまだそら組タイムで決めることにしました。

メロンパン会議(第1日目後半)

子どもたちの気持ちはもう「メロンパン決め」でいっぱい!

朝に出たあらゆる順番の案を、こういうこと…と確認、整理するところから会議を始めました。

しかし降園時間になり、順番は決まっていないものの、「何人ずつお店屋さんをするのがいいと思うか」を考えてくることを宿題にして、続きは朝の会ですること。

メロンパン会議(第2日目)

みんな気合十分?の朝の会。恒例のメロンパン手遊びは、お店屋さんが決まっていないので、せずに朝の会・会議に突入です。

T:何人ずつの順番にしたらいいと思うか考えてきた?

C:考えてきた!!

T:〇〇さん、考え教えて

C:「4人ずつがいいと思う」

T:どうしてそう思ったの?

C:「だって、こういってら分かりやすいから」

…という風に、何人ずつがいいかとその理由、同じ考えだった人・違う考えの人を聞いていきました。

もちろん、子ども同士の会議なので、話が行ったり来たりしたり、理由はなかったり、斜めの順番を強く希望する子がいたり(笑)しながらでしたが、

**全員がひとつの目的をもって
お友だちの考えにも耳を傾けて
いっしょけんめい考える**

ことができました!!2日目の会議はなんと20分以上!長時間集中していました。

中略しますが、結果は「メロンパンが5個あるから5人ずつ」という、説得力のある考えが採用され、5人で交替していくことに決まりました。

「じゃあ、5人ずつどうい順番でしようか?」と問いかけると、「先生が決めていいよ!」との返答。「いいの?!」と確認しましたが満場一致で頷いてくれました。

きっと、皆でひとつの結論に達したことで満足したのでしょうね!

…ということで、今は名前順でメロンパン屋さんを楽しんでいます♪